

アルティメット選手の心理的競技能力について

第二報

瀧澤寛路¹⁾・村本名史¹⁾・栗田泰成²⁾・笹川 慶³⁾・高根信吾¹⁾

On Psychological Competitive Ability of Ultimate Players

The Second Report

Hiromitsu TAKIZAWA Morifumi MURAMOTO Yasunari KURITA
Kei SASAKAWA Shingo TAKANE

要 旨

本研究の目的は、競技歴の異なるアルティメット選手に「心理的競技能力診断検査 (Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes. 3) 以下DIPCA.3と略す」を実施し、競技歴の差による心理的競技能力の違いを明らかにすると共に、アルティメットにおける競技能力向上の為の基礎的資料を作成することである。

アルティメット競技歴5年以上の選手におけるDIPCA.3の総合得点平均値は、187.11であり、一方、5年未満の選手における平均値は173.37というものであった。総合得点の平均値は、競技歴5年以上の選手が、5年未満の選手に比べ有意に高かった。5年以上の選手は、5年未満の選手に比べ、心理的競技能力が高いことが考えられる。

また、DIPCA.3における5因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子の平均値では、競技歴5年以上の選手が5年未満の選手に比べ有意に高いことが明らかになった。

さらに、DIPCA.3における12尺度においても、有意な差が観察されたが、今回のアルティメット選手は、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力という7尺度の平均値では、競技歴5年以上の選手が、5年未満の選手に比べ、有意に高い値を示した。

従って、競技歴5年以上の選手は、5年未満の選手に比べ、緊張を強いられる場面であってもリラックスしてパフォーマンスを発揮し、また、失敗を恐れず、自信を持って、ゲームをコントロールでき、さらには、冷静で落ち着いたプレーをコンスタントに実施できることが推察される。

Abstract

The purpose of this study was to examine the psychological competitive ability of Ultimate players to collect basic data for competitive ability improvement. The average total score on the Diagnostic Inventory for Psychological Competitive Ability 3 (DIPCA.3) was 187.80 for those with more than five years of competitive experience and 177.24 for those with less than five years of competitive experience. This suggests that psychological competitive ability was significantly higher in players with more than five years of competitive experience than in those with less. When comparing their scores in the “five factors,” it is evident that players with more than five years of competitive experience are higher to those with less, in mental stability and concentration, confidence, and strategic ability. Examination on the “twelve scales” also shows a significant difference between the groups—players with more than five years of competitive experience had significantly higher scores than those with less—on the scales of self-control, ability to relax, concentration, confidence, decision, predictive, capability, and judgment. In conclusion, players with more than five years of competitive experience could exert more stable performances, more accurately control the game, and play more calmly in comparison to players with less than five years of competitive experience. In addition, they could consistently evaluate a situation properly in a variety of circumstances.

¹⁾ 常葉大学経営学部経営学科 ²⁾ 常葉大学健康科学部静岡理学療法学科 ³⁾ 南山大学

はじめに

アルティメット^{注1)}は、『1チーム7名からなる2チームが、100m×37mのコート内でフライングディスク^{注2)}をパスにより運び、相手エンドゾーン(ゴール)内で味方からのパスをキャッチすれば、ポイント(1点)となるディスク版のアメリカンフットボール。スピードや持久力、ディスクのスロー技術、チーム戦術等、フライングディスクのあらゆる要素が集約されることから、ULTIMATE(究極)と呼ばれる。』¹⁾

近年、我国におけるアルティメットチームは大学生を中心に増加の傾向にあり、2015年度に日本アルティメット協会に登録しているチームは、性別・年齢不問のオープン部門に、大学生75、社会人47、女子のみのウィメン部門に、各々63、22、男女混合のミックス部門には社会人のみ18、性別不問の満33歳以上のオープンマスター部門に4、女子のみ満30歳以上のウィメンマスター部門に2、さらに、性別不問・小中高生を対象としたユース部門に19であり、合計すると250チームである。

さらに、アルティメットの日本代表チームは、諸外国には体格差では劣るというハンディキャップを、スピードとスロー技術、チーム戦術等で補い、国際大会において、現在までに数々の好成績を挙げている。^{注3)}すなわち、我国は、世界でも有数のアルティメット強国と云えよう。

その一方で、我国においてアルティメットの認知度は未だ乏しく、ニュースポーツ、マイナースポーツと言われて久しい。現行では、アルティメットは発展・普及の途上にある。しかしながら、ラグビーやサッカーにも決して引けを取らない激しさと高い競技性を持ち合わせているスポーツである。

従って、プレーヤーの体力、技術、チーム戦術のみならず、当然、メンタルコントロールも重要なスキルになる。しかしながら、アルティメット選手を対象としたメンタル面への科学的なアプローチはほとんど見当たらないのが現状である。

そこで、筆者ら²⁾は、第一報にて、アルティメット選手を対象として、徳永らが開発したDIPCA.3を実施し、アルティメット選手の心理的競技能力を性差に着目し、以下のような結果を得ている。

先ず、アルティメット選手の心理的競技能力は、5因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子において、男子の平均値が女子に比べ有意に高く、協調性においては、女子の平均値が男子に比べ有意に高いことが明らかになった。

さらに、12尺度においても、自己コントロール能力・自信・決断力・判断力の4尺度については、男子の平均値が女子に比べ、有意に高い値を示し、一方、協調性に

ついては、女子の平均値が男子に比べ、有意に高い値を示した。従って、男子は、女子に比べ、緊張を強いられる場面であっても、安定したパフォーマンスを発揮し、ゲームを的確にコントロールでき、女子は、男子に比べ、協力的で、相互に尊重し合うことが明らかになった。

ところで、我国のアルティメット競技においては、大学入学後に競技活動を開始する選手がほとんどであり、野球やサッカーなどのメジャースポーツ選手との間には、競技歴において大きな違いがあることが特徴的である。

徳永³⁾はDIPCA.3では、『経験年数、大会参加数、優勝経験等により、DIPCA.3の値が異なる』ことを述べている。

そこで、本稿では、アルティメットの競技歴における心理的競技能力の違いを明らかにすると共に、競技能力向上の為の基礎的資料を作成することを目的とする。

方法

対象者

競技歴5年以上の選手

2015年7月13、14日に静岡県富士市富士川緑地公園で開催された第4回全日本社会人アルティメット選手権大会に出場した社会人選手、ならびに同年7月25日～8月4日にコロンビア・カリで開催されたワールドゲームス日本代表(ミックス部門のみ)に出場した男子24名、女子16名の合計40名(年齢 31.48 ± 9.52 [22～41]歳)であった。

競技歴5年未満の選手

2015年7月12～18日にイギリス・ロンドンで開催された23歳以下世界大会(男子・女子・ミックスの3部門)の日本代表候補である男子46名、女子43名の合計89名(年齢 20.83 ± 2.83 [18～23]歳)であった。

検査期日

競技歴5年以上の選手は2013年7月、競技歴5年未満の選手は2015年1月であった。

検査方法

徳永らが開発したDIPCA.3を実施した。

DIPCA.3は、スポーツ選手が、パフォーマンスを発揮するために必要な心理的競技能力を診断するものである。

心理的競技能力を、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子と規定し、さらに、各因子は、忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、自己

コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性の12尺度から構成されている。(表1.)

また、12尺度の具体的な内容は表2.の通りである。

表1. DIPCA.3における心理的競技能力の因子および尺度

5 因子	12 尺度
競技意欲	忍耐力・闘争心・自己実現意欲・勝利意欲
精神の安定・集中	自己コントロール能力・リラックス能力・集中力
自信	自信・決断力
作戦能力	予測力・判断力
協調性	協調性

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」
p. 8 (株) トーヨーフィジカル出版部 2009

表2. 12尺度の具体的な内容

1. 忍耐力	がまん強さ、ねばり強さ、苦痛に耐える。
2. 闘争心	大試合や大事な試合での闘志やファイト、燃える。
3. 自己実現意欲	可能性への挑戦、主体性、自主性。
4. 勝利意欲	勝ちたい気持ち、勝利重視、負けず嫌い。
5. 自己コントロール能力	自己管理、いつものプレイ、身体的緊張のないこと、気持ちの切りかえ。
6. リラックス能力	不安、プレッシャー、緊張のない精神的なリラックス。
7. 集中力	落ち着き、冷静さ、注意の集中。
8. 自信	能力・実力発揮・目標達成への自信。
9. 決断力	思いきり、すばやい決断、失敗を恐れない決断。
10. 予測力	作戦の的中、作戦の切りかえ、勝つための作戦。
11. 判断力	的確な判断、冷静な判断、すばやい判断。
12. 協調性	チームワーク、団結心、協調、励まし。

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」
p. 12 (株) トーヨーフィジカル出版部 2009

検査は、48の質問項目、並びに、回答の信頼性を判定する4項目(Lie Scale)、合計52の質問構成となっている。

各質問に対する解答は全て、1. ほとんどそうでない(0~10%)、2. ときたまそうである(25%)、3. ときどきそうである(50%)、4. しばしばそうである(70%)、5. いつもそうである(90~100%)の5段階に分けられており、被験者は最も自分に当てはまる番号を選ぶというものである。番号はそのまま得点となり、12の尺度が各20点満点となっており、総合得点は240点満点となる。尚、Lie Scale(20点満点)が、12点以下であれば、信頼性が乏しいと判断し、診断を回避する。

分析方法

DIPCA.3の採点、得点判定、プロフィールの作成は、徳永⁴⁾の手引書に従って行った。まず、5因子において平均値と標準偏差を競技歴5年以上の選手と5年未満の選手の両群で求め、両群における平均値の差をウェルチのt検定を用いて分析した。次に、12尺度においても

両群の平均値と標準偏差を求め、同様にウェルチのt検定を用いて分析した。

結果並びに考察

競技歴5年以上の選手のDIPCA.3総合得点の平均値は、187.11であり、一方、5年未満の選手の平均値は、173.37というものであった。(表5.)

DIPCA.3を開発した徳永ら⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾、また、檜塚ら⁹⁾は、『経験年数が長い選手ほど、総合得点が高い傾向にある』ことを示唆しており、今回のアルティメット選手においても、総合得点の平均値は、競技歴5年以上の選手が、5年未満の選手に比べ有意に高かった。

従って、アルティメット選手の総合得点における競技歴の違いは、先行研究と一致し、競技歴が長い選手は、相対的に心理的競技能力が高いことが伺える。

さらに、表3.は、心理的競技能力における総合得点の判定表である。競技歴5年以上の選手の判定は4(やや優れている)であり、一方、5年未満の選手の判定は3(もうすこし)の判定であった。

表 3. 心理的競技能力総合得点の判定表

判定 評価	1 (かなり低い)	2 (やや低い)	3 (もうすこし)	4 (やや優れている)	5 (非常に優れている)
男子	141以下	142~164	165~186	187~209	210以上
女子	131以下	132~154	155~178	179~202	203以上

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」
p. 12 (株) トーヨーフィジカル出版部 2009

その理由として、『優秀な選手、試合中の心理状態が優れている選手、実力発揮度が高い選手は、総合得点が高い』という徳永¹⁰⁾の指摘の通り、今回の競技歴5年以上の選手40名の内、日本代表経験を有する選手は、実に31名(78%)おり、極めて競技レベルが高いことが推察される。

一方、5年未満の選手89名の内、日本代表経験を有

する選手(2014年イタリア・レッコで開催された19歳以下世界大会の日本代表)は、僅か3名(3%)であり、相対的に、競技レベルが低いことが推察される。

次に、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子得点における競技歴について検討した。心理的競技能力の5因子得点を競技歴別に集計したものが表4.である。

表 4. アルティメット選手の5因子得点

5因子	競技歴5年以上(40名)		競技歴5年未満(89名)		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
競技意欲	64.23	9.68	63.08	6.60	0.69
精神の安定・集中	48.84	8.16	42.92	8.05	4.29***
自信	28.66	6.45	25.72	5.26	2.65*
作戦能力	27.78	5.98	24.66	5.10	2.86**
協調性	17.60	2.92	16.99	2.60	1.14

*: p < 0.05 **: p < 0.01 ***: p < 0.001

精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子において、競技歴5年以上の選手が5年未満の選手に比べ有意に高いことが明らかになった。

徳永¹¹⁾は、DIPCA.3の各因子に関して、『10年以上のスポーツ経験者は、精神の安定・集中、自信、作戦能力で優れている』と述べている。

また、学生ソフトテニス選手を対象とした古谷ら¹²⁾の先行研究においても、『中学校以前に競技を開始した選手が、高校、あるいは、大学から開始した選手に比べ、男女共に、競技意欲、自信、作戦能力、協調性において、有意に高い』ことが報告されている。

さらに、女子ハンドボール選手を対象とした檜塚ら¹³⁾においても、『5因子全てにおいて、競技経験が長い選手が有意に高い』ことを報告している。

今回の競技歴5年以上の選手の中でも、10年以上の競技歴を有する選手が、実に、29名(73%)おり、この選手達の存在が結果に影響を及ぼしたことが推察され

る。

徳永¹⁴⁾は、『経験年数が10年以上にもなると、多くの試合に参加し、その体験から、試合場面で必要な心理的能力を身につけていることが推測されます。このことがキャリア(経験)の差ということでしょう。例えば、ここは「耐えなければならない」という時に忍耐力を発揮出来るということです。試合の場で生じるいろいろな場面で、それが必要とされる時に、必要な能力を発揮できるということです』と述べている。

今回のアルティメット選手は、先行研究とほぼ同様な因子得点の傾向を示した。このことから、アルティメット選手の心理的競技能力が他の競技スポーツとほぼ同様の特徴を示していると推察できよう。

最後に心理的競技能力12尺度得点における競技歴について検討した。心理的競技能力の12尺度得点を競技歴別に集計したものが表5.である。また図1.は両群の尺度別プロフィールである。

表 5. アルティメット選手の心理的競技能力 12 尺度における得点の平均値と標準偏差

12 尺度	競技歴 5 年以上 (40 名)		競技歴 5 年未満 (89 名)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
忍耐力	15.78	3.36	14.61	2.62	1.95
闘争心	17.60	2.76	17.15	2.44	0.89
自己実現意欲	15.70	3.20	15.90	2.25	-0.36
勝利意欲	15.15	2.83	15.42	2.43	-0.51
自己コントロール能力	16.08	2.56	14.39	3.01	4.67***
リラックス能力	15.83	3.49	13.06	3.58	4.13***
集中力	16.93	2.84	15.47	2.68	2.74**
自信	14.53	3.27	12.84	2.99	2.77**
決断力	14.13	3.44	12.88	2.72	2.03*
予測力	13.75	3.31	12.22	2.89	2.51*
判断力	14.03	2.97	12.44	2.63	2.90**
協調性	17.60	2.92	16.99	2.60	1.14
総合得点	187.11	25.95	173.37	18.96	3.18***

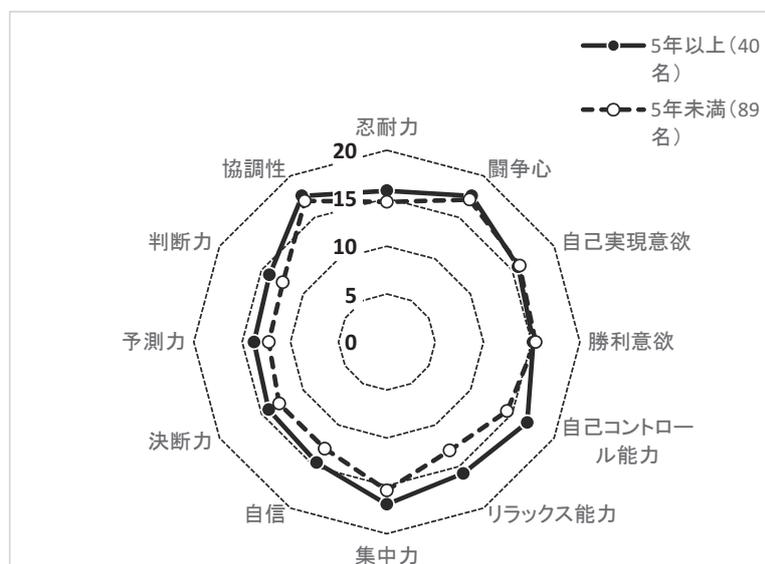
* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$ 

図 1. アルティメット選手の尺度別プロフィール

まず、競技歴 5 年以上の選手における 12 尺度の得点順位が高い順は、1. 闘争心、1. 協調性、3. 集中力、4. 自己コントロール能力、5. 自己実現意欲であった。一方、5 年未満の選手における 12 尺度の得点順位が高い順は、1. 闘争心、2. 協調性、3. 自己実現意欲、4. 集中力、5. 勝利意欲の各尺度であった。

両群共に、闘争心と協調性が高い尺度であった。アルティメットのゲームでは、男女を問わず、高いファイティングスピリットと積極的なプレーが要求されるため、戦う姿勢を全面に押し出す必要がある。また、他の競技スポーツ同様に、チーム内でのコミュニケーションや互いを敬う姿勢も重要なスキルとなる。第一報においても、同様な結果が得られており、従って、両群共に、上位の尺度であった、闘争心や協調性は、アルティメット選手の心理的特徴である可能性を示唆していると考えられる。

また、徳永¹⁵⁾は、プロフィール表において『線が外側に広がり、高得点になるほど望ましいといえます。また、線のデコボコ(凸凹)が少ないほどバランスがとれています。すなわち、円が外側に大きく、デコボコが少ないほど望ましい心理状態』であると述べている。図 1. のプロフィール表でも闘争心と協調性が共に外側に近く、アルティメット選手の特徴が示唆されていると思われる。

さて、今回のアルティメット選手における 12 尺度においても、有意な平均値の差が観察されたが、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力という 7 尺度において、競技歴 5 年以上の選手が、5 年未満の選手に比べ、有意に高い値を示した。

従って、競技歴 5 年以上の選手は、5 年未満の選手に

比べ、緊張を強いられる場面であってもリラックスしてパフォーマンスを発揮し、また、失敗を恐れず、自信を持って、ゲームをコントロールでき、さらには、冷静で落ち着いたプレーをコンスタントに実施できることが推察される。

ところで、セーリング競技のナショナルチームとユースナショナルチームを比較した萩原¹⁶⁾らの先行研究によれば、『ナショナルチームは、ユースナショナルチームに比べ、忍耐力、自己実現意欲、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力が有意に高い』ことが報告されている。

また、選抜選手、強化選手、大学生、高校生の4群における剣道選手を比較した植田ら¹⁷⁾は、『競技経験年数が長い選手が、そうでない選手に比べ、勝利意欲以外の11の尺度において有意に高い』ことを報告している。

さらに、前述した学生ソフトテニス選手を対象とした古谷ら¹⁸⁾の先行研究においても、『中学校以前に競技を開始した選手が、高校、あるいは、大学から開始した選手に比べ、男女共に、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力を除いた、9尺度において、有意に高い』ことが報告されている。

このように、競技歴の違いが、心理的競技能力に影響を及ぼすことが顕著であることが報告されている。

今回のアルティメット選手においても、他種目における先行研究とほぼ同様な傾向がみられた。

まとめ

日本のアルティメット選手、競技歴5年以上の選手40名（男子24名、女子16名）、並びに、競技歴5年未満の選手89名（男子46名、女子43名）についてDIPCA.3を実施し、心理的競技能力における競技歴の違いについて分析したところ、以下の結果が明らかになった。

1. 競技歴5年以上の選手におけるDIPCA.3の総合得点の平均値は、187.11であり、一方、5年未満の選手における平均値は、173.37というものであった。総合得点の平均値は、競技歴5年以上の選手が5年未満の選手に比べ有意に高かった。アルティメット選手における総合得点の競技歴の違いは、他種目の先行研究と一致し、競技歴が長い選手は、心理的競技能力が高いことが伺える。
2. DIPCA.3の5因子得点では、他種目の先行研究結果と同様に、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子において、競技歴5年以上の選手が5年未満の選手に比べ有意に高いことが明らかになった。

また、それらの因子レベルも、他種目と同等レベルであった。従って、アルティメット選手の心理的競技能力は他の競技スポーツと同様の特徴を示していると推察できよう。

3. DIPCA.3の12尺度得点については、7尺度について競技歴による差がみられた。自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力の7尺度においては、競技歴5年以上の選手が、5年未満の選手に比べ、有意に高い値を示した。また、第一報と同様に、12尺度のプロフィールからみて、アルティメット選手は、闘争心と協調性が高く、特徴的であった。

アルティメットにおいては、大学入学後に競技活動を開始する選手がほとんどである。野球やサッカーなどのメジャースポーツ選手との間には、競技歴において大きな違いがあることが特徴的である。

そこで、今後の課題として、競技歴における性差、さらには、国際大会参加数などが、DIPCA.3の値にどのように影響を及ぼすのかを検討してゆきたい。

謝辞

本研究に際しては、日本アルティメット協会の方々には格別な配慮を賜りました。ここに氏名を記して深甚の感謝を捧げる次第です。

日本アルティメット協会会長 本田 雅一氏
同チーフプロデューサー 大井 誠氏
同プロデューサー 梅原 貴正氏

注

1) アルティメットのゲームの進め方

ゲーム開始前に、オフenseとディフェンスを決め、各々のエンドゾーン内に横一列に並び、ディフェンスチームからのスローオフでゲーム開始となります。スローオフ前には、どちらのチームともゴールラインより前には出られません。両チームとも相手のエンドゾーンがゴールとなり、オフenseチームは、味方同士のディスクのパスで攻撃を展開していきます。その際、ディスクを持っているプレーヤーは歩くことができません。ディスクを保持したプレーヤーが軸足を移動したり、歩いたりするとトラベリングという反則になります。パスしたディスクが地面に落ちたり、アウト・オブ・バウンズとなった場合(ラインから出た場合)、または、ディフェンスチームのプレーヤーにインターセプト、あるいは、パスカットされる、ストーリングアウトになる(マーカーはスローワーの3m以内の位置についた時点で「ストーリング」とコールし、1秒間隔で10(テン)カウントを

始める。スローワーは10の声が発せられる前にディスクを投げないとストーリングアウトとなる。)等がおきた場合などは、ターンオーバー (T.O.) となり、その場で攻撃権は、相手のチームに移ります。プレー中にディフェンスへの走路妨害が起こった場合は、ピックという反則になります。1点入るごとにコートチェンジを行い、前のプレーで得点したチームがディフェンスとなり、スローオフを行います。

(<http://www.japanultimate.jp/> 日本アルティメット協会より引用)

2) フライングディスク

フライングディスクとはプラスチック製の円盤状のディスクのことで、一般にはfrisbee (Frisbee) という名称 (アメリカ・ワムオー社製の登録商標) で呼ばれることもあります。フライングディスクの起源は、1940年代、アメリカのアイビーリーグの名門校であるエール大学の学生たちが、キャンパス近くの「frisbee・ベーカーリー」のパイ皿を投げ合ったのが始まりといわれています。その光景に興味を持った建築検査員のフレッド・モリソン氏が1948年、金属製のディスクを試作し、その後の改良で現在のプラスチック製のディスクが誕生しました。いまでは、材質に改良が重ねられフライングディスクの飛行性能は、最長飛距離「255m」、最高時速「時速140km」、最長滞空時間「16.72秒」ときわめて優れたものとなっています。

(<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用)

一般社団法人 日本フライングディスク協会によれば、『本協会が加盟している世界フライングディスク連盟 (WFDF) の加盟・準加盟国は56カ国で、全世界における愛好者人口は約6,000万人、競技者人口は700万人に達するといわれており、1989年には、IOCが後援する非オリンピック種目の世界大会「ワールドゲームス」のエキジビション種目となりました。そして、2001年8月に秋田で開催された第6回ワールドゲームスからは正

式競技に採用されました。1995年には、国際スポーツ90団体の連合体であるGAISF*の正会員にも認められており、2013年にはWFDFがIOC (国際オリンピック委員会) に準公認団体として認められ、オリンピック種目化への第一歩を踏み始めました。その他、フライングディスクは、文部科学省をはじめとする様々な組織が主催する生涯スポーツ講習会に採用されており、1999・2000・2002・2003年にはNHK教育テレビの番組「テレビ・スポーツ教室」にも取り上げられ、スポーツとしての認識が高まってきました。(財) 笹川スポーツ財団の「スポーツライフ・データ調査」によれば、フライングディスクの愛好者人口は約150万人に達しており、150校を超える中学・高校・大学などの授業にも採用されています。また、1996年からは全日本アルティメット選手権大会が文部科学大臣杯をいただく大会に認められました。』

(<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用)

* GAISF: General Association of International Sports Federation

国際スポーツ連盟機構。オリンピック種目以外の国際大会を主管する。

フライングディスク競技には、アルティメットを含め、公認されている10種目が存在する。詳細については、<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会のHPを参照されたい。

3) アルティメット日本代表の戦績

2015年7月イギリス・ロンドンで開催された、23歳以下世界アルティメット選手権大会に出場した日本代表の戦績は、オープン部門が第3位、ウィメン部門が優勝、ミックス部門が、第7位であった。

以下に、過去の日本代表の戦績を示す。

日本代表の戦績

年	開催国	O	W	M	OM	WM	U-19 O	U-19 W
2015	WFDF2015 世界 U-23 アルティメット選手権 大会 ／イギリス	3 位	優勝	7 位	-	-	-	-
2015	世界ビーチアルティ メット選手権大会 ／UAE	10 位	-	15 位	-	-	-	-
2014	世界アルティメットク ラブチーム選手権大会 ／イタリア	7 位	6 位	8 位	6 位	4 位	-	-
2014	世界ジュニア (U-19) アルティメット選手権 大会 ／イタリア	-	-	-	-	-	9 位タイ	7 位タイ
2013	ワールドゲームズ ／コロンビア	-	-	5 位	-	-	-	-
2013	世界 U-23 アルティ メット選手権大会 ／カナダ	6 位	準優勝	3 位	-	-	-	-
2012	世界ジュニア (U-19) アルティメット選手権 大会 ／アイルランド	-	-	-	-	-	9 位	8 位
2012	世界アルティメット& ガッツ選手権大会 ／日本 (堺)	5 位	優勝	3 位	3 位	3 位	-	-
2011	アジア・オセアニア アルティメット選手権 大会 ／台湾	優勝	-	優勝	-	-	-	-

O：オープン部門／W：ウィメン部門／M：ミックス部門／OM：オープンマスターズ部門／
WM：ウィメンマスターズ部門／U-19 O：U-19 オープン部門／U-19 W：U-19 ウィメン部門／
U-23 O：U-23 オープン部門／U-23 W：U-23 ウィメン部門／U-23 M：U-23 ミックス部門

出所：http://www.japanultimate.jp/ 日本アルティメット協会

文 献

- 1) <http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用
- 2) 瀧澤寛路・村本名史・栗田泰成・高根信吾・笹川 慶：「アルティメット選手の心理的競技能力について～第一報～」pp.29～37 常葉大学経営学部紀要 第2巻 第2号 (2015)
- 3) 徳永幹雄：「ベストプレイへのメンタルトレーニング～心理的競技能力の診断と強化～」pp.51～52 大修館書店 (2010)
- 4) 徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」pp.8～15 (株) トーヨーフィジカル出版部 (2009)
- 5) 「同上書」p.69
- 6) 徳永幹雄：「ベストプレイへのメンタルトレーニング～心理的競技能力の診断と強化～」pp.51～52 大修館書店 (2010)
- 7) 徳永幹雄：「スポーツ選手に対する心理的競技能力評価の尺度の開発とシステム化」pp.91～102 健康科学 23 (2001)
- 8) 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東 健二・稲福 勉・齊藤 孝：「スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差、競技レベル差、種目差」pp.109～120 健康科学 22 (2000)
- 9) 檜塚正一・伊達万里子・田島恭江・田中美紀：「女子ハンドボール選手の心理的競技能力に関する研究～経験年数および大会参加経験別による比較～」pp.55～62 武庫川女子大学紀要 48 (2000)
- 10) 徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」pp.8～15 (株) トーヨーフィジカル出版部 (2009)
- 11) 徳永幹雄：「スポーツ選手に対する心理的競技能力評価の尺度の開発とシステム化」
- 12) 古谷 学・谷口幸一「学生ソフトテニス選手の心理的競技能力に関する研究」pp.29～38 九州体育学研究 7 (1) (1993)
- 13) 檜塚正一・伊達万里子・田島恭江・田中美紀：「同上書」
- 14) 徳永幹雄：「ベストプレイへのメンタルトレーニング～心理的競技能力の診断と強化～」pp.51～53
- 15) 徳永幹雄：「同上書」p.28
- 16) 荻原正大・米倉礼子・藤原 昌・千足耕一：「セーリング競技における国内一流選手およびユース選手の心理的競技能力」pp.51～61 スポーツパフォーマンス研究 6 (2014)
- 17) 植田史生・福本修二・吉田泰将・石出 靖・望月康司・大嶽真人：「剣道における心理的競技能力調査について」pp.25～33 慶應義塾大学体育研究所紀要 44 No.1 (2005)
- 18) 古谷 学・谷口幸一「前掲書」

